
そして、世界は崩れゆく

南 しゅう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして、世界は崩れゆく

【Nコード】

N2514F

【作者名】

南 しゅう

【あらすじ】

彼女いない暦Ⅱ年齢、高校2年の相楽祐一。外面はよくても性格は最悪、同じく高校2年の伊藤ハルカ。隣同士に住む2人の世界は音を立てて崩れ始める。

0

好きだった風景

嫌いだった場所

いつも変わらない景色

まだ始まらない物語

昔見た夢

すれ違う思い

つまらない現実

変わっていく幻想

そして、世界は崩れゆく

0 (後書き)

初めまして、南しゅうです。

上に掲載されているのは前置きです。

よろしければ次話もお読み下さい。

1章 1

白くて、儚くて、脆い。

ある冬の日、北海道札幌市に雪が降っていた。

札幌といっても広い。大通り公園や時計台、狸小路やテレビ塔、すすきのにあるような大きな看板も、ここからはけっして見えることはない。電車に30分も揺られれば札幌駅には着くけれど、ちょっと背伸びしてお洒落な服を買うときぐらいしか行くことなんてない。毎日あるのは学校と、寒い中、汗が吹き出るまで行われる雪かき。親父が角地に家なんか建てたからその量は普通の倍……。文句の1つでも言っても罰はあたらないうんじやないかと、最近思う。

少年は空を仰ぐ。

曇天とした空は、今日も鉛色をしている。そのツンと突き立った髪にも雪は容赦なく降り積もる。

「んがぁー！何なんだよ、人がせっかく綺麗にしたのに次から次へと！」

少年は叫んだ。これは雪国だからしかたないと割り切れるものじゃない。なんだってこんなところに住んでいるんだ。親父は九州の出身なのに、なんだって端から端へ？向こうは向こうで辛いっていうけど絶対にこっちの方が辛い。……確かに噂に聞くあの黒い物体は恐ろしいけど、それにさえ慣れればいいにきまっている。

だから少年は暴れた。紫色の普通よりちよつと便利なスコップを片手に自らの集めた雪山をおもいきり叩く。そして、そんな様子を見つめる少女が1人。

「祐一……？あんた何やってんの？いきなり叫ばないでよね、珍しいもの見たってのを通り越して恐いんだけど」

少年の名前は相楽祐一、さがらゆういちつい先日17歳になったばかりの高校2年。表向きはクールでシャイ。でも本当はただの根暗で彼女いない暦11年齢のどこにでもいるようでない男。

「うるせえな……俺だってたまには叫びたい時だってあるんだよ」

その祐一に眉をひそめながら声をかけたのは伊藤ハルカ、ブレザーの学生服にもうこれも学生服でもいいんじゃないかと思うほどありきたりなコート、肩までのストレートの黒髪がマフラーからはねていた。歳は祐一と同じ17歳、か、どうかは祐一は知らないが高校2年。

小学2年のとき小樽から引越してきて始めて出来た友達がハルカだった。今でこそ高校も違うし、話すことも殆どなくなったが、中学までは毎日といっていいほど一緒に学校も行っていた。そのおかげで同級生だけじゃなく上級生からも睨まれた7年間ではあったのだが、何せ家が隣なんだからしかたがない。確かにハルカは昔から可愛かったし、祐一は小学生の頃、眼鏡で前髪ぱつつの坊ちゃんがりだったし、気持ちは祐一にもなんとなく理解できた。結局は祐一の一方的な片思いということで周りはなんとか落ち着いていたけれど、まったくの誤解だった。ハルカに惚れるわけがない。近くにいればいるほどそれは明確にはっきりとわかる。現に祐一はハルカの仲のいい女と意気投合したことがある。どのくらい伊藤ハルカ

という女の性格が捻じ曲がっているかという一点で、……他に接点はまるでないのだが。……とにかく、この女は昔から外面だけはいい。その女達に対してすら、だ。わかっているのはほんの僅かだった。だからその女達には嫌われてはいないし、むしろ好かれている。……つまり祐一は伊藤ハルカが嫌いである。

「あっそ、ついでに私の家の前もやっというてよ」

「なんで俺がやんなきゃいけねえんだよ」

言いながら祐一はスコップを雪山にズブリと突き刺す。

「……そりゃ、ケイコさんの為に」

「……ずるくないか？それ」

「だってあんたケイコさんには、ものすごく恩があるわけだから、むしろ自分からやりたいでしょ？」

「……わかったよ、やるよ。だからさっさと帰れ」

「はいはい、じゃ頑張って」

ハルカは祐一の方を見もせず祐一の除雪した道を通って隣の自宅へと帰っていった。

「くそっ、……でも確かにここも俺がやらなかったら恵子さんがやるんだもん……。そう思えばしかたない、か」

恵子はハルカの母親で、父子家庭の祐一にとって長い間母親がわ

りを努めてくれた人であった。祐一の父親は仕事柄、帰宅が遅くなることも多く、そのため、夕食も1人で過ごすことが多くあった。しかし、祐一にとってそれは寂しくもあったが、しかたのないことだと割り切っていた。そんな祐一を見かねて恵子は母親がわりをかって出たのだ。お隣である伊藤家と家族同然の付き合いとなった祐一は当然、ハルカとも家族同然になるわけで、だから他人で唯一、ハルカの本性を知る人間とあいなったわけだ。

祐一が自分の敷地の雪かきに加え、お隣さんの敷地の雪かきをも終えた頃には、太陽の姿はすっかりなくなり、道路を挟んですぐ隣にあるガソリンスタンドの明かりで照らされた祐一はすでに生ける屍と化していた。

「まったくあのガソリンスタンドが俺に優しい点は照明だけだな」

ガソリンスタンドが近くにあるというのは便利なようだが、車に縁のない祐一にとってうるさいだけである。垂れ流されるポップな音楽と掛声はすでに公害の1種。いいことなどありはしない。そんなスタンドを横目に睨みつけながら身体に積もった雪をほろう。その僅かな雪も箒で掃くことを忘れない。祐一の神経は意外と細かいのだ。

家に入ると祐一を出迎えるのは暗闇。入ってすぐ右手側にあるスイッチを押して明かりを灯し長靴を脱ぐ。トイレのあるホールを抜け最初に向かったのは洗面所だった。

「暑いお湯が出ます」

「へいへい」

スイッチと連動した機械の音声に律儀にも返事をしながら服を洗濯籠に詰め、風呂場に入り、シャワーのお湯が温かくなったのを確認してから脳天からシャワーを浴びる。

これが祐一の雪の降った冬の日の日課だ。祐一は進学しない。というか入った高校がとんでもなく偏差値の低い学校で進学する奴なぞ一握りだ。そんなわけだから受験勉強とは離れた存在。就職はすでに父親の知り合いの会社に決まっているし。学歴よりも経験がものをいう仕事なので就職。これに関しては昔から決まっていた。特に反論もない。趣味もないし、やりたいこともない。ぬるま湯につきりながら敷かれたレールの上を歩くのだ。

不意に鏡に映った自分を見る、髪は短く、出かけるときにはセツトもする。眼鏡も今はしていない。高校で出来た友達に進められてコンタクトにした。基本のつくりは悪いわけじゃなかったから今はまるつきりモテないわけじゃない。が、彼女が出来たことはない。……おそらく原因はお隣に住む女。すでにある種のトラウマなのかもしれない。女が怖い。女性恐怖症ではないが深く関わりたくない。そんな思いが祐一の深層心理には深く刻み込まれている。

ガチャ、

音がした。玄関の開く音。

「親父?……にしては早いな」

チャイムもなしに入ってくるのは父親だけなのだが、こんな時間に帰ってくるのは何ヶ月ぶりだろうか。

「ユウ!!?!? いないの!!?!?」

「なっ!?!げほっ!?!げほっ!?!」

(あ、あいつ……なに勝手に入ってきてんだよ!? 確かに昔はそうだったけど……てか、あいつ何年ぶりに俺のことユウって呼んだ?)

祐一はあやまって気管に入りそうになったお湯を吐き出していると、曇りガラスのドアが叩かれる。

「ちよつとユウ!?!お風呂なんか入ってる場合じゃないから!?!」

「な、なんだよ!?!なんなんだよいきなり!?!」

「いいからすぐ出て来なさいよ!?!5分以内よ!?!わかった!?!」

ハルカはシルエットだけでも十分に恐ろしい。

「わかったよ、今出るから……お前もまず、そこから出ろ」

＊

「遅い!?!……て、あんた何て格好してんの!?!」

「そんなこと言われても着替えなんて持ってきてないし……」

裸にバスタオル1枚、誰がいるわけでもない家でわざわざ着替えを持って風呂に入るほど祐一も人間出来てはいない。

「あーもう、早く着替えてきて!」

ハルカはほんの少し頬を朱に上気させ、そっぽを向いて、勝手知ったる他人の家とばかりに祐一の部屋の方向を指差す。

「へーい……」

祐一はしぶしぶと指差された方向、つまりは階段を上り、自室に入る。

「あいつは何なんだ？あいつの家なのか？ここは」

ぶつぶつと文句を垂れつつも寝巻きである上下黒のスウェットに身を包み、再びハルカの待っリビングへと足を向ける。しかし、いざ戻るとハルカはふてり顔で戻ってきた祐一になど目もくれずテレビを見つめていた。

そんな様子につられ祐一も思わずテレビを見る。映っていたのは机に座った1人の男性アナウンサー、なんてことはない平凡なニュース番組。

「なんだよ、お前はわざわざニュースを見に来たのか？」

「……………」

ハルカはテレビに視線を貼り付けたまま口を開こうとはしない。

「おい」

「あんた編入して来るって本当？」

「？」

唐突にハルカから放たれた言葉を祐一は理解できない。

「あんたの頭で編入試験なんて受かるの？」

「……何の話だ？」

「何の話って……もしかして知らないの？」

「……何をだよ」

「あんたが私の学校に転校してくるって話」

「はい？」

編入？ 転校？ 何を言ってるんだこいつは、だいたい人と話してる時くらい顔を見て話してほしいものだ。

「はあ……もういい、帰る」

ハルカは盛大に溜息をつくと座っていたソファから立ち上がり背を向ける。

「おい、待てって。説明しろよ」

「……………」

返事はない。ハルカは無言のまま玄関に向かう。

「……無視かよ」

そして玄関の開く音。

「ただいまー、あれ？ ハルカちゃん来てたのかい？」

聞きなれた声。ハルカが玄関のドアを開けて帰ろうとする寸前、祐一の父親が帰ってきたのだ。

「久しぶりだね、最近顔見ないからどうしたのかと思ってたけど綺麗になったもんだ。ハルカちゃんもすっかり大人の女だね。あっそうだ。恵子さんには言ってあるんだけど来週から祐一がハルカちゃんの学校通うことになったから、またよろしく頼むよ」

「……お久しぶりです。あの、私もう帰りますんで失礼します」

「そうなのかい？ せっかくだからもっとゆっくりしていてもいいのに」

「いえ、夕食もありますし、どうもお邪魔しました」

「うん、またいつでも遊びにきてね」

「はい、それじゃ失礼します」

と、いう会話が未だリビングに突っ立っている祐一にも聞こえてきたわけだが、どうにもおかしな点があった。そういえばあいつも同じようなことを……。

「……来週から祐一がハルカちゃんの学校に通う？ 祐一って俺……だよな」

祐一が呟いていると父親である健介がいつもの調子で入ってくる。

「おお、祐一。お前、ハルカちゃん帰るんなら玄関までぐらい送ったらどうなんだ？」

「……そんなことよりも親父、俺があいつの学校に通うってどうゆうこと？」

「ありゃ？言ってなかったっけか？お前、転校するんだよハルカちゃんの学校に」

「……何故に？」

「あー、そういえばめんどくさくて説明してなかったなあ……悪い悪い。実はお前の就職なんだがな、やっぱり高卒じゃちょっと難しくなっとな、大学行かないとまずいんだよ」

「へ？」

「だからな、俺の広い人脈を生かしたコネでお前をハルカちゃんの学校に転校させたわけだ。なにせお前の学校バカだろ？あそこじゃー進学は厳しいだろ、それに比べてハルカちゃんの通う学校は付属、エスカレーター式で大学まで行けるってわけだ。うん、父さん賢い」

あっけにとられる祐一をよそに「じゃ風呂はいるから」といって父の健介はいなくなる。

「来週……て、今日金曜だぞ！？」

1章 1 (後書き)

お読み下さいまして、ありがとうございます。

更新速度は不定期ですが、できるだけ速くしたいと思っています。

恋愛ベースのファンタジーで結末はなるべくハッピーエンドに……。誤字、脱字、多々あるかと思いますが、宜しくお願いいたします。

南しゅう

変更前の1話を読んで続きを期待していた方がいましたら申し訳ありません。

いろいろ考えた結果、設定を大幅変更いたしました。

南しゅう

私は間違っていたのだろうか。……いや、間違っていないはずだ。多次元平行存在理論は正しかった。多次元、つまりは私たちの住んでいる世界とは違う世界、異次元世界が平行して存在するという理論。幾度となく馬鹿にされ続け、罵られ続けてきた。そんなものはあるはずがない、と。しかし、私の理論は証明されたのだ。確かに当初、私が提唱していたのは霊界の存在だった。異世界の存在を見たものはいないが、霊を見る人間はいる。それは事実。それでも科学では証明されることは不可能だとされていた。何故ならそれは根元の部分、根本からして間違っているからだ。霊などは存在しない。心霊現象というものは全て平行して存在している異世界の干渉によってもたらされたものだからだ。

最初に私が興味を持ったのは魔術だった。魔術は魔法などではない。あれもまた違う視点から行われてきた科学なのだ。魔術について調べ始めると膨大な量の実験データが顔をだし始めた。殆どはいかにも胡散臭いものばかりだが、中には興味深いものも数多く存在した。そして、私が興味を引かれたのが憑依というものだ。これは心霊現象にも通じるものがある。イタコやシャーマンに代表され、多くの実例があるこの現象、そして見つけ出したのがアガステアの葉。アガステアとは紀元前3000年頃、インドに存在していた聖者の名だ。彼は自らにシヴァ神を憑依させ、鹿の皮に古代タミル語でこの世に存在する全ての個人に対する予言、過去、現在、未来の運命を書き残しており、それは現在も椰子の葉に書き写され残っている。

私はインドへと渡った。

*

アガスティアの葉はインドにいくつかあるアガスティアの館に保存されている。私は信頼のおける通訳の元、館へと足を運んだ。

館の内部は普通の家と大差はない。アガスティアの葉は現地の人間にしてみれば、あたりまえの存在のものだという。この先どうしてよいか悩んだとき日本だと占いとおなじような感覚でアガスティアの館を訪れる。そのためか、そこには現地の人間が列を成していた。

「本当にここで見つかるのか？」

私は通訳に声をひそめ聞いた。

「それはわかりませんが、見つかる可能性は高いですよ」

半日ほど待っただろうか、私の番が回ってきた。通された場所は殺風景な事務所のようなたたずまい。横長の机にナディ・リーダーと呼ばれる2人の男が出迎えた。1人は髭を蓄えた40～50の男、もう1人はすでに70は軽く超しているであろう老人だった。

私はまず親指の指紋をとられた。男性なら右親指、女性なら左親指なのだという。指紋は108種類に分類されるらしく、そこから私の葉を探すのだ。そして探し出されてきた葉は、縦4～5cm、横2～3cm程度の葉というよりは薄い板のようなもの、それが、およそ60枚の束で私の前に出された。そこからは葉に書いてある記述を元にYESかNOの簡単な質問が延々と繰り返される。

「あなたの父親は健在ですか？」

「あなたが生まれたのは3月ですか？」

「恋愛結婚ですか？」

「子供は1人ですか？」

そのような質問を繰り返されること5時間がたった時だ。

「両親は健在ですか？」

「はい」

「1964年生まれですか？」

「はい」

「2月の生まれですか？」

「はい」

「15日に生まれましたか？」

「はい」

「あなたの名前はヨウスケですか？」

「はい」

「あなたの父親の名前はサトシですか？」

「はい」

「あなたの母親の名前はカズコですか？」

「はい」

私の葉はついに見つかった。思えばこの時から全てはずれ始めていたのかもしれない。

私の葉が見つかるのと2人のナディ・リーダーの男は私に深々と頭を下げた。通訳が「どうしたのですか？」と聞いても2人は頭を上げず、沈黙を保つ。そして不意に言われた言葉はこうだった。

「あなたはシヴァ神を呼び出す者です」

と、

私は間違っていたのだろうか。…………いや、間違っていない、いないはずだ。

2 (後書き)

お読み下さいまして、ありがとうございます。

ここまではプロローグのようなものです。次話から本編になります。

この2話目ですが大幅の設定変更の為、全て書き変えるかもしれません。

南しゅう

祐一は見上げていた。目の前に広がっているのは白く美しく大きな建造物。その建物の名前は藤代学園大学付属藤代高等学校と云うらしい。今まで17年間生きてきて関わることのなかったもの、つい先日まで祐一は言ってみれば吹き溜まりのような場所で2年近くを過ごしてきたのだ、灰色で薄汚れていて山の上にあるような学校、通ってる人間はいい奴ばかりだったけど世間のはみ出し者で将来は日本社会のピラミッドの底辺近くで汗水垂らして働く。祐一もそんな中の1人だった。それでいいとも思っていた。

「はぁ……」

憂鬱だった。まさか本当に転校することになるなんて思わなかった。前の学校ではろくに挨拶もしてない。まあ、もう会えなくなるわけでもないからそれはいいとしても、いきなり知らない場所に行かされるのは精神衛生上よくない。今なら崖の上から落とされる獅子の子供の気持ちの方が分かりそうなもんだ。いや、無理やり登らされた、の間違いか。

「まずは職員室か……」

祐一は肩を落としながら校内へと足を踏み入れた。さすがに転校初日、かなり早い時間から来ているからか、人の姿は見えない。見たことのない違う制服の人間を見て驚かれないのはいいが、さすがに1人も人がいないと職員室の場所もわからない。こんなことならあの女に聞いておけばよかった。もう、しらみつぶしに探すしかない。

しかし、歩けど歩けど職員室はない。このままでは呼ばれている時間に間に合わなくなってしまう。だいたいこの学校が広すぎるの

が悪いのだ。同じような壁に同じような窓、

(まずいな……)

そう思ったときだった。

「祐一か？」

「え？」

突然、後ろから声をかけられた。しかも名前つきで、いったい誰だ？ 祐一が振り向いた先にいたのは背も高く、端正な顔立ちで祐一のどこにでもある上下とも黒の学ランとは違う、どことなく神聖なという言葉がしっくりくるような深い緑色のブレザーの似合う男。

「……健吾？ おお、健吾！ そうか、お前この学校だったっけか！」

中学時代の親友、さえづかけんじ冴塚健吾だった。その広い肩に手をかけて祐一は目を丸くした。

「ははっ、やっぱり祐一だったか、後ろ姿でまさかとは思ってたんだが……どうしたんだ？ こんなところで、ハルカならまだ見てないぞ？」

「なんであいつの名前が出て来んだよ」

「だって祐一といったらハルカだろ？」

「……あのなあ」

「ごめんごめん、でも本当にどうしたんだ？」

「……いや、それがな俺も未だに実感ないけど、どうやら俺も今日からここの生徒らしいんだ」

「え？……あつ、まさか転校生って……」

「たぶん俺」

「まじ？」

「大真面目だよ。それでついといったらんだけど職員室までの案内頼めるか？ 実は時間結構やばいんだ」

「あ、ああ、いいけど……まさか祐一が転校生とは……新鮮味がまったくないな」

「悪かったな」

「ほんとだよ、転校生なんて始めてだから可愛い女の子なんじゃないかって期待してたんだけどなー」

「世の中そんなに甘くないってことだ」

「だな、……それにしても祐一、制服そのままなのか？」

「ん？ ああ、めんどうだからな」

「いいけどさ……かなり目立つぞ？ いろんな意味で」

「そうか？ そのうち慣れるだろ」

「まあ……後々気付くよ」

「なんだよそれ」

「さあな」

2人は声をだして笑い合いながら職員室へと向かった。

「ここだよ」

「悪いな」

「いって、俺もたまたま早く着ただけだから、それじゃまた後で、一緒のクラスになれるといいな」

「おう」

さっそうと廊下を歩いていく健吾の背中を見送ると祐一は職員室のドアをノックする。

（職員室って苦手なんだよな）

「失礼しまーす、あの相楽祐一なんですが……」

職員室のドアを開けると一斉に視線が集まる。

（……なんだ？俺なんかしたか？）

「き、君が相楽君？」

「あ、はい」

その無言のプレッシャーに1歩後ろに下がってしまいそうになるのをこらえ祐一は声の主を見る。

ハムスター。それが第一印象だった。小さく可愛いらしいが教師としての威厳はゼロに近い。それなりの年齢の女性に対して失礼かもしれないが、まったくもって頼りない。第一なんでこんなにもおどどしているのか理解できず祐一は首を傾げる。

「あ、あたしは、君の入る2-D担任の遠藤奈津美、……よろしく願います!!」

ブンッ、と音が鳴りそうな勢いで担任の遠藤奈津美は頭を下げる。

「は、はあ……」

本来まず頭を下げるべきは祐一なのに先にこんなにも下手にでられてしまったらどうすればよいのだろう。困惑しながらもとりあえずは祐一も頭を下げる。

「相楽くんはあの三谷高校の生徒だったんだよね……?」

祐一の下から窺うようにして奈津美は訪ねる。

「そうですけど?」

「だよね、聞くけど、さ、相楽くんもその、やっぱり……ふ、不良だったりする?」

なるほどな……。祐一は胸中で呟く。確かにこの制服はここではいろんな意味で目立ちそうだ。

「誤解ですよ先生、確かに年中ケンカばかりしてる奴もいますけど、本当に悪い奴は1年の頃に辞めてます。外見はアレですけど先生の思ってるような不良はいませんよ」

「そうなの……？」

「ええ」

祐一は慣れない笑顔を作り微笑んでみせた。

「よかったあ……」

奈津美はよほど不安だったのか気の抜けたように安堵の声を漏らすと床にへたり込んでしまった。

「先生！？……大丈夫ですか？」

「ごめんなさい。……安心したら力抜けちゃった」

そう言ってお返しとばかりに奈津美が見せた笑顔はいやに眩しく感じた。

＊

「初めまして、相楽祐一です。よろしくお願いします」

反応は予想以上に冷たいものだった。目を合わせる奴などいやしない。考えてみれば、こんな時期に評判のよくない学校から冴えない男が転校してきたのだ。こんなものかもしれない。祐一は溜息をつく。

「先生、俺はどこに座れば？」

「えーっと……速水さんの隣が空いてるわね、とりあえずはそこに座って、窓際の後ろよ」

適当な返事をして祐一がその席に近づくと今まで無反応だったクラスの子供達の顔が曇り始める。

（……なんだ？）

疑問を感じながらも祐一は席に着く。そして、理由ははっきりとしてきた。

（あの転校生……やっぱあそこに座ったよ）

（速水がどうするか見ものだな）

（でもちょっとやばくない？あの転校生三谷高から来たんでしょ？）

（大丈夫だろ、ほんとにやばい奴なら編入できないって）

（先生もなにも知らないとはいえ、ひどいよね）

原因はどうやら隣の速水という女生徒のようだ、しかし、これといって不審な点は見当たらない。いたって普通の生徒だ。ずっと俯

いていて顔はよく見えないが……。

それにしても、あの女と違うクラスになったのは幸いだが健吾と違うクラスになったのは痛い。1人でも友人がいれば状況も大分違っただろうに。

「はい、これでHRは終わります。それと速水は相楽くん転校してきましたばかりでいろいろわからないことも多いだろうから教えてあげてね」

「はい……」

かすれるような小さな声で速水と呼ばれた生徒は返事をした。

「悪いな」

祐一が声をかけると速水は1度ビクリと肩を震わせ静かに頷いた。そんなに怯えなくてもいいだろう、と思いつつも更に言葉を重ねていけるほど祐一は外交的な性格ではない。前に向き直り再び溜息を1つ。

「相楽くん、よろしくな、俺は轟武人^{とじろきたけと}呼び方はタケトでもタケでもタケちゃんでもいいぜ」

やはりどこにでもこの手の人間はいるもんだ。祐一はほっと胸をなでおろすと振り返って満面の笑みを見せている武人に視線を合わせた。

「安心したよ、いきなり嫌われたんじゃないかって不安だったんだ、俺も気軽に名前で呼んでくれて構わない」

「ははっ、そんな陰気なクラスじゃないよ、じゃあ改めてよろしく祐一……でよかった？」

「ああ」

「それとさ……」

先程とは対照的にタケトは声をぎりぎり聞こえる程度にひそめる。

「隣の速水麻衣とはあまり関わらない方がいい」

やはりなにかある。

「気付いてるかもしれないけど彼女ちよつとあつてね……説明は……後ですよ。とにかくわからないことは俺に聞いてくれ」

「ああ……わかった」

祐一も転校初日からは面倒ごとに関わりたくはない。今はタケトの言うとおりにすることにしたのだった。

学校が違うといっても教科書なんかは変わらない。前の学校に比べると進み方はかなり違ってはいたが思ったほどの差でもない。この感じでいけば2年の終わりごろまでには追いつけるだろう。初めて受ける授業の感想はそんなところだった。同じような調子で4時間がつつがなく終り昼休み。教室のドアが勢いよく開いた。

「ゆーいちー？ いるかー？」

やってきたのは健吾だった。

「おう、健吾どうした？」

「どうしたはないだろ、祐一が友達も出来ず困ってるんじゃないか
と思って昼飯を誘いに来てやったのに」

「お前な……」

「おっ？タケトの後ろなのか、こいつなれなれしいだろ？」

「なれなれしいってなんだよ！俺は人見知りしないだけなの！」

健吾が武人を軽く小突きながら話す。

「友達なのか？」

祐一が健吾に尋ねると健吾は数秒間考えた後、首を傾げながら答えた。

「んー、レギュラーとベンチの関係？」

「素直に友達だって言えよ！……てか健吾こそ祐一と知り合いなのか？」

「親友だよ」

言いながら健吾は肩を組んでくる。

「いや、否定はしないが……」

「なんか切ないんですけど……」

うな垂れるタケト。

「まっとにかく学食に行こう、祐一は弁当とか持って来てるのか？」

「いや、ない」

「なら俺にまかせとけ、スペシャルメニューを組んでやろう」

「それはありがたいんだが……」

祐一はタケトを見る。……まだうな垂れている。

「おいタケト！……じゃあな」

「誘えよ！！」

転校初日の昼休みはこの3人で迎えることになりそうだ。

3 (後書き)

お読み下さいましてありがとうございます。
ようやく本編スタートです。

南しゅう

「初めまして、私、伊藤ハルカです」

ハルカの表情は完全に作られた顔。偽りの笑顔。長年近くで見えてきた祐一にはそれが痛いほどにわかる。同時にその眼光だけで「合わせろよ?」と言っているのもわかる。しかし、いくらなんでもその設定はバレないか?と、こちらからもアイコンタクトで送ってみても返信はない。さて、

「俺はどうしたらいいんだ?」

こんなことになったのは理由がある。昼休み、それは学生にとって昼飯を食べる時間だ。だから祐一と健吾と武人の3人は仲良く学食に来了。着いてみるとそこは今までいた学校とは大違いの世界。高校の学食とは思えないほどに広い空間、食欲をそそる香り、目移りするほどのメニュー、それまではよかった。確かにここの学食はいい。人気もでるだろう、席が埋まるのも当然の結果だ。しかし、空いている席が悪い。丁度席は3つ空いていた訳で、なにも知らない武人がこれはラッキーとばかりに急いで席をとった。うん、いい動きだ。なんの部活かは知らないがベンチなのが不思議なくらいだ。学食のテーブルは6人掛け、つまりは先客が3人いるわけだ。そして……そこにあの女がいた。

「……俺はおもしろいけどな」

祐一の空中に投げかけた疑問に答えたのは健吾だった、でも微妙に答えになっていない。武人にいたってはこの不穏な空気にまるで気付いていない。見た目、美人のハルカやその友達と昼を共にでき

るのが嬉しいのだろう。目をお花畑を眺める少女のように輝かせている。

「あなたが噂の転校生ね、いったい何しに来たの？」

毒、会話に毒が入っている。笑顔のまま言うから友達も気にしてないみたいだけど正面に座る俺には伝わる。確実に怒ってらっしやる。

「……転校してきたんだ」

「へえ、そうなんだ」

どうでもいいけどお前、額に青筋浮いてるからな、と心の中で祐一は注意するが無駄らしい。そこへ、ハルカの友達が会話に興味しんしんとばかりに参加してきた。

「あの、名前なんていうんですか？」

「……相楽祐一」

「私、小倉未来こくらみくです。相楽くんって三谷高校から来たんですね？」

「……ああ」

祐一は表向きはシャイでクールな男、だが本性はただの根暗。当然、初めて会った女の子になどこの程度の返ししかすることはできない。

「……………暗っ」

ハルカは誰にも聞かれない声量でボソリと呟いた。が、祐一にはしっかりと聞こえていた。

「…………うるせえ、外面だけの性格ブス」

祐一も誰にも聞かれない程度の声量で呟く。が、やはりハルカにはしっかりと聞こえていたようだ。

「…………なんだとこの根暗眼鏡」

しかも声が大きくなっている。

「…………今は眼鏡してねえだろうが、この不法侵入者」

「…あんたの家なんだから私がいつ入ろうが勝手でしょ」

「…その発想がそもそもおかしいんだよ、勝手に入るなよ、チャイムぐらい鳴らせ」

「何でいちいちそんなことしないといけないのよ、あんただって勝手に入って来たときあったでしょ!？」

「いやいや、あれは恵子さんが入れてくれたんだよ、勝手に入ったわけじゃない」

「はあ!?! 私の家なんだから私に断りなさいよ!」

無茶苦茶だ、この女は、

「お前だけの家じゃねえだろ!? 恵子さんと和幸さんが建てた家だよ!」

「……なあ、もしかして……、2人って知り合い?」

気がつけば、祐一とハルカは立ち上がって声を張り上げていた。そして武人の一言で2人は凍りつく。答えたのはまたしても健吾だった。健吾はライスを箸で口まで運び、飲み込むと呆れたように口を開く。

「知り合いもなにもこの2人は小学校からの幼馴染で家も隣同士、どうなるかと思って黙って見てたけど結果は……予想通りだな。結局お前らには知らないフリなんて土台無理なんだよ」

立ち上がった男の方は声を張り上げた口もそのままに、女の方はゆっくりと肩を落とす。

「……食欲なくなった。私戻る」

ハルカはそう言い残すと足早に歩き始めた。

「ちょっとハルカ!? まってよ! 私たちも行くよ!」

「なんかよくわからないけど、わ、私も!」

少し小さくなったハルカの背中を追い、2人の友人たちもその場を急ぎ立ち去る。取り残されたのは立ったままの祐一、とそれを見守る健吾、名残惜しそうにハルカ達の背中を見送る武人の男3人。

「あー……行っちゃった……」

「とりあえず飯を食おうか」

健吾の言葉に祐一は無言で座ることで答える。

「なんなんだよあいつ」

「昔は仲良かっただろ？」

「表向きはな」

「でもやっぱり今でもたいして変わってないと思うぞ」

「……そんなはずはない、今は表向きも仲が悪い」

「だから、それも含め、たいして変わってないよお前ら」

「あの、私1人会話についていけないんですけど……」

「変わったよ、今は隣に住んでも話すことなんて殆どない」

「そうなのか？」

「あの、僕も会話に……」

「ああ」

「それでも、ハルカがあんな風に話すのお前だけだぞ？」

「そんなん知らねえよ」

「ふう……あいかわらずだねえ……」

「溜息をつきたいのは俺の方」

「俺だよ!!!!」

今度は武人が立ち上がって声を荒げていた。

「……………」

「……………」

「そういえばさ……」

「ながすなよ!!!!」

「やかましいぞタケト。見ろ、お前が大声だすから、みんなこっち見てるぞ」

「……え？」

武人が周囲をうかがうと、見る場所見る場所、視線がぶつかる。しかも全員眉が少しばかり吊り上っている。

「す、すいませーん……」

申し訳なさそうに静かに腰を下ろすと武人は祐一と健吾を順に睨む。

「お前らが無視するから……」

「はいはい」

健吾は武人に手の平を軽く仰ぐように振る。

「祐一なんて会ってまだ半日も経ってないのに……」

「半日でも、なんとなくタケトのポジションがわかったからなあ……」

「……確かに間違っただけだし、俺的には間違っただけだったというか、このイジられキャラをできれば知られたくなかったというか……」

祐一と健吾は「わかったから、わかったから」と、なんだか意気消沈といった感じのタケトをなだめ、健吾のスペシャルメニューらしいラーメン、餃子、ライス、の午後からは誰としゃべれなくなりそうなセットを苦心しながらも食べ終えた。

そうして1息ついた祐一はどうしても気になっていたことがあった。

「なあ、タケト」

「なんだ？ そのお前の残した餃子は俺も食えないぞ」

「……それはいいとして、1つ聞いていいか？」

「？」

「俺の隣の席に座ってた……確か速水って名前の女について」

「……それか」

タケトは祐一が始めて席に近づいた時のクラスメイト達と同じように顔を曇らせる。

「説明、してくれるんだろ？」

「やっぱ……気になるよな……？」

「そりゃ、な」

「ふう……わかった、話さなきゃいけないし……。あいつさ、速水麻衣は簡単にいうとイジメにあってる。」

「……………」

「イジメっていつでも暴力を振るわれたり、そんなじゃなくて陰口を言われてるだけなんだけどさ」

祐一も少しの予想はしていた。その速水という女生徒に対するクラスメイトの態度は普通とは違っていたから。

「昔はイジメられるようなタイプじゃなかった。活発で明るくて、世話焼きで、いつも笑ってるような……とにかくいい奴だった。それがあるとき急に変わっちゃったんだ。あいつはおかしくなった。前の夏休みがあけたら人が変わったみたいに無口になって、話しかけても「はい」とか「うん」とか言わなくなって……先生たちは知らないだけどさ……これ、なんだと思う？」

タケトは右腕の袖をまくって祐一にスポーツマンらしい少し筋肉質な腕を見せる。

「……………傷？」

「俺、刺されたんだ。あいつに」

「嘘だろ…………？」

「嘘じゃない、…………付き合ってたんだ俺達。…………今も別れてはいないんだけど、さ」

祐一は何も言えなかった。健吾も口をへの字に曲げて黙り込んでいる。そのくらいタケトの表情はいたたまれなくて、悲しそうに笑っていた。

「何度も何度も話しかけた。「はい」と「うん」しか言わなくても…………俺、本気で好きだったから。どうしたんだよ、何があったんだよって…………そしたら…………こうなった」

タケトは傷を撫でながら話す。その傷を見る目は少し愛おしそうに見えた

「ごめん…………いい、もういい。悪いこと聞いた」

「いや、聞いてくれ。あのクラスに、あの席に…………いや、俺の友達になったんだったら聞いてもらわないと困る。何かあってからじゃ困るんだ」

はつきりとした言葉で、まっすぐに祐一を見る。

「わかった……」

他に選択肢はない。

「調べた。夏休みに何があったか、正確には夏休みの終りに……、夏休みの終わる3日前、あいつは友達と肝試しに行ってたんだ」

「肝試し？」

「ああ、いわゆる心霊スポットって奴。……そこはこころじゃ有名な場所で、首吊り神社って呼ばれててさ。あいつ……麻衣はバイト先の先輩と5人でそこに行ったらしいんだ。神社があるのは劉奏山ってとこでさ」

「知ってるよ……俺も行ったことある」

「じゃあ、話ははやいな……………」。

＊

「何？麻衣怖いのか？」

「そ、そんなわけないじゃん」

「麻衣……声震えてる」

「笑わないで下さいよ！これは、これは寒いだけです！！」

私の名前は速水麻衣。バイトの先輩の奈菜さん達に誘われて首吊り神社に来ている。時間は午前1時。周りは木ばかりで、月明かりも届かないってくらいすごく暗い。それに夏だっていうのに本当になんだか寒い。……私、なんでこんなところ来ちゃったんだろう？ 苦手なのに……こういうところ。

「それは確かに……あー上着着て来ればよかった」

奈菜さんは確かに寒そう、私もだけどTシャツ1枚だけ、でも何でだろ？ さっきまでは夜だっていうのに汗ばむくらい暑かったのに、山の奥……だからかな？

「お前ら、あんまり遅いとマジで置いてくぞ？」

「ちょ、ちょっとやめて下さいよ!？」

「そんなことしたら、あんた達に掃除全部押し付けるからね」

「……それは勘弁」

「この中じゃ、私が1番偉いんだから、その辺理解しとくこと」

「職権乱用……」

「何か言った？」

「い、いえ、何も言ってますん!」

「それじゃ、しっかり私たちを守ってよね」

奈菜さんにこんな笑顔で言われたら誰もも逆らえない。

「……でも、別に何もでないと思うけどなあ……何か出たって話聞いたことないし」

「……盛り下がること言わないでよね」

そんな会話をしながら私たちは森の奥へ進んでいった。

4 (後書き)

お読み下さいまして、ありがとうございます。
ご意見や感想頂けたら幸いです。

南しゅう

「浅生先輩……本当にこの道であってるんですか？」
あそ

「大丈夫だって、心配するなよ。俺ここ来たの2回目だから」

暗闇と木々の葉がざわざわと擦れる音、むせるような土の臭い。
日常とは違う風景が不安を掻き立てる。私はいつの間にか奈菜さんの腕をがっちり掴んで離せなくなっていた。

「ところで先輩、なんで首吊りなんです？」

「ん？ああ、小野ちゃんは地元違うんだっけ？」

「はい、僕は最近こっちに越してきたんで」

「誰がやったのかは知らないけどさ、境内けいだいの鈴あるのわかるか？」

「ええ、はい」

「あそこここにさ、首吊り用のロープが吊ってあるんだよ」

「……もしかして、それだけですか？」

「根も葉もない噂ならたくさんあるぞ」

「それ、下手したらただのお参りじゃないですか」

「いや、あれはあれで結構怖いよ？一見の価値はあると思うけど」

な」

大学3年で今日の企画の首謀者でもある浅生先輩は懐中電灯を片手に先陣を切って歩いている。それに並んで同い年の小野くん、1つ年上の香野^{かおるの}さん。その後ろに奈菜さんと私。前の3人は獣道といっても過言ではない山道をピクニックのように楽しんでる。こっちはそれどころじゃないのに……。

「ちよつとまだなの？歩き始めてから30分くらいたったんだけど」

「なんだよ奈菜、お前体力には自信あるっていつも言ってなかったけか？」

「そうゆう問題じゃないでしょ？」

「わかってるよ、もうすぐだから……おっ！？ほら石段見えてきた」

浅生先輩は懐中電灯の光を前方に向けた。

「うわ……気持ち悪いな……麻生さん、本当ににここって大丈夫なんですか？」

「麻衣に続いて香野もビビりか？」

「誰でも多少はビビりますよ、こんなところ。浅生さんがちよつとおかしいんです」

「だって俺、幽霊なんて見たときないしな」

「俺だってないですよっ、と……ポルターガイストならありますけ

ど」

言いながら香野さんは石段に転がっていた石と岩の中間くらいの大きさの物体を蹴飛ばす。

「……まじ?」

「はい、小野くんも見ただろ?」

「え、ええ」

……ちよつと待って、この土壇場に来て怖い話はじめるつもり!? じよ、冗談じゃない!

「ストップ、ストップ、ストーーーーーップ!! やめてくださいよ怖い話なんて!!」

「い、いきなり大声ださないで……心臓とまるかと思った……」

「ご、ごめんなさい」

奈菜さんも平気そうな顔してるけど本当は怖いのかもしれない。

……単純に私の声に驚いただけかもしれないけど。

「なんだよ麻衣い? お前、怖くないんじゃないのか?」

浅生先輩は振り返って意地悪そうな笑みを浮かべていた。

「う、うるさいですよ!」

「はい、ごめんなさいねー」

「……もう」

——ねえ……——。

「なんです？」

私はすぐ横にある奈菜さんの横顔を見つめた。

「なにが？」

「……え？」

気のせい、気のせい。そんなはずない。ありえない。だってここは雰囲気だけが怖い心霊スポット。……ちよつと怖すぎだけど、本当になにかあったなんて聞いたことないし、私は生まれて一度もお化けなんて見たことない。

「なんでもない、です……」

「大丈夫？ 顔色……はよく見えないけど、なんか変よ？」

「大丈夫ですから……」

「……そう？」

声なんて聞こえてない大丈夫、後はこの石段登りきって、変な口
ープ見て帰るだけ、大丈夫、怖くなんかない。

「……よっ、しゃ。やっと登りきったー、……ん？」

「……あれ、ですよね？」

小野くんの声は少しばかり震えていた。

「あ、ああ」

「……なにか、ぶら下がってませんか？」

そこには、古ぼけてて、今にも崩れそうで、本来の目的で訪れら
れることのなくなった、廃墟があった。生い茂る蔓や草木に侵食さ
れながらも異様な存在感をもって、今もそこに在ることを示すモノ。

「あれって……首……？」

本来あるはずの鈴、しかし、廃墟と化し心霊スポットとなってし
まった今となっては、そこには首吊り用のロープが垂らされている。

揺れていた。

その垂らされた紐は確かな重量を持ち、ギシリ、ギシリ、と嫌な
音を立てて、ひっそりと、緩やかに。

「浅生さん……照らして見てください」

「ま、待ってくれよ。俺、幽霊は見てみたいけど、生首なんて見た

くないぞ」

「……貸してください」

香野さんは浅生先輩から懷中電灯を奪い取ると、ぶら下がる何かに近づく。私たちは声も上げれずに震えることしか出来なかった。

「……やっぱりマネキンですよ、これ」

「へ？」

「照らしますよ」

光の中に現れたソレは美容室なんかでたまに見かけるウィッグと呼ばれる首だけのマネキンだった。

「誰かが悪戯でやったんでしょうね、偽者とわかってても気味悪いです」

——聞こえてるんでしょ？……。——。

「……！？」

「どうしたの……？」

——ほら、聞こえてる……。——。

「違う……」

———やっと見つけた……—。

「やめて」

———でも、君じゃ足りない……—。

「やめて!!」

———だから君には眼になってもらうね……—。

＊

「そしたら、あいつ急に叫びだしたらしくて」

武人は視線を下げて鬱々とした表情をしていた。

「……それから、なのか？」

「ああ、その後とんでもない力で暴れだして、男3人でようやく取り押さえたらしい。それで病院連れてって、精神安定剤打ってもらってやっと落ち着いて……それからずっとあの調子」

「なんだよ、それ……」

「学校の中じゃ有名になってる。速水麻衣は取り憑かれていかれちゃったって」

久々に口を開いた健吾は申し訳なさそうに呟いた。

「……そういうことだ、だから祐一もあんな気にすんなよ」

「そうは言っても……」

「もう、どうしようもないんだ。出来るのはそっとしておくことだけだ」

何も出来ない。そう、自分には何も出来ない。なにもしない。例え心当たりがあったとしても………。

5 (後書き)

少し短いですが1章はこれで終了です。
次話からは2章です。

書き方が適当になっていっているのを感じますが……いずれ改善したいです……。

アクセス数が気付けば2500を突破していました！ありがとうございます！

南しゅう

2章 1

違う、僕のせいじゃない。僕は悪くない。

「……自殺ですって」

どうして僕を見るの？僕は何もしてない。

「ええ、なんでもお子さんがね……」

何も知らない。何もわからない。

「そうなんですか？……お気の毒に……」

どうしてお母さん死んじゃったの？どうしてもう会えないの？

「これからどうするのかしら……ご主人お1人なんでしょう？」

どうしてどうしてどうして？わからないわからないわからない。

「大変ね……」

これは……————夢だ。

背中が冷たい。

昔見た夢、よく見た……夢。

目覚めると、時計の針は6を僅か回ったところだった。あれから1週間が過ぎた。全てが急だった転校劇、最初は警戒していたクラスメイト達も1人を除きだんだんと慣れてきたようだ。……最も向こうから話しかけてくることは殆どないのだが。

「ふう……」

祐一はまだ睡眠を欲している身体に鞭を打ち起き上がる。さすがに2度寝する程余裕はない。黒の遮光カーテンをジャッと開け、冬の太陽を部屋に招き入れる。今日も気持ちのいい晴れ、降り積もった銀の雪に光が反射して真夏よりも眩しいくらいだ。祐一はカーテンに続き窓も開け放つ。冬の空気は鋭く冷たいが澄んでいて気持ちがいい。

カチツ、カチツ、

高校に入って煙草を覚えた。最初は周りに合わせてかつこつだけで始めた習慣、それがいつの間にか止められなくなっていた。立派なニコチン中毒、友人は煙草は20歳になってからじゃない、20歳になるまでだ。と言っていた。もちろん言い訳にもなってない言い訳なのだが、本当に止められるのなら、その方が正しいのではないのかと祐一も笑いながら賛同したのを覚えている。

「すう……はあ……」

煙を吸わなくても白くなる息が更に白くなる。祐一は思い返す、昔はあの夢を見た朝はいつも泣いていた。それをいつもハルカが慰めてくれていたっけ……。

本当にいつから仲が悪くなったのだろう。あいつは性格の捻じ曲がった嫌な女だけど、嫌いじゃなかった。嫌味しか言わないし、泣き虫ですぐ怒るけど……

祐一はぶんぶんと首を振る。やっぱり嫌いだ、あんな女。

ガラスの灰皿にガシガシと煙草を押し付けて祐一は立ち上がる。少し早いけど学校に行こう。

男子高校生たるもののどんなに雪が降り積もってもローファーは譲れない。そんなどうでもいいプライドのつまった黒の革靴に足をはめる。そして玄関に手をかけ、重い扉を開いた。昨晚僅かばかり降ったらしい3cmほどの雪を踏み前を向く。……そこであいつに会った。

どうしたものか、ここ数年、朝の挨拶など交わしたことがない。少し前までだったら逆方向だったから問題なかったけど今は同じ、駅まで歩いて10分、電車で揺られること20分、そこからまた学校まで10分。同じ道を歩くことになる。さて……どうしたものか、

ほんの一瞬そんなことを考えている間にハルカは1度だけ祐一を見るとさっさと歩き出した。なんとなく予想はしていたが、やはり無視を続けるらしい。ハルカとはあの学食での一件以来、会話という会話をしていない。故意によるものなのか、それとも声も聞きたくないのか、……どっちも故意か。とにかく祐一も今更引き返すわけにもいかず、ハルカの背中を不可抗力ながら追う。

ギュッ、ザクッ、ギュッ、ザクッ、

一定の間隔を保ちながら2人は歩く。

ギュッ、ザクッ、ギュッ、ザクッ、

そういえば何故ハルカはこんなにも早いのだろうか？部活に入るような奴じゃないし、わざわざ朝早くから学校に行って勉強をする奴でもない。でも、高校に入って変わったのかもしれない、自分も高校に入ってからかなり変わったのだ。ハルカが変わっていてもおかしくない。この距離は広がるばかりで縮まることはもうないのだ。

「……後ろ、歩かれてると気持ち悪いんだけど」

急に振り向いたかと思ったら、こんな言葉が飛んできた。……本当に嫌な奴。

「しかたねえだろ、駅まで1本道なんだ、それくらい我慢しろよ」

「……………」

沈黙は肯定。言葉のキャッチボールは成立しない。

しかし、駅に着くと予想外の事が起きた。電車の発射時刻と同時に着いてしまったのだ。時間はいつもより早いんだから急ぐ必要はないのだが、そこは人としての性^{さが}なのか飛び込むように通勤ラッシュで満員の電車に乗り込んでしまった。2人同時に、同じ車両に。

「……もうちょっと離れてよ」

「無理だったの、周りをよく見ろ」

朝の電車内はいつも込んでいるが、これはひどい。人いきれにあ

てられて目眩を起こしそうだ。祐一は自分でも不思議だったが、壁際にハルカを守るようにしてスーツ姿のサラリーマンや学生達と格闘していた。これも、人としての、いや、男としての性なのかもしれない。

「変なところ触んなよ……？」

ハルカにゼロ距離で睨まれる。認めたくはないが、かなり整った顔立ちで猫科の動物を連想させるような人一倍大きな瞳で凄まじるとかなり怖い。

「……んなことしねえよ」

「キモい親父に触られるよりはマシだけど」

「……痴漢なんているのか？」

「結構ね、友達にも被害者多いし」

「……………」

付き合いが長いとこういう時に困る。わかってしまうのだ言いたい事が、つまりこの女は守れと言っている。これからこうしろと、もちろん祐一にそんなことをする義理はないのだが気付いてしまうともう遅い。やらずにはいられないのだ。……これもまた男として、

「……お前、いつもこの電車なのか？」

「うん、そう」

「……わかったよ」

「何が？」

「なんでもいいだろ」

こういう奴だ。昔から、ハルカは笑っていた。わかっているのだ、この女も、わかった上で「何が？」と聞いている。……本当に嫌な奴。

＊

幸いと普通よりも早い時間、登校してくる生徒は少ない。転校生が編入1週間目にして女と一緒に登校、などという噂はたたないだろう。なにしろ一定の距離は保たれたままだった。

祐一は人もまばらな教室に入り、自分の席に座ると机に突っ伏した。

眠い。圧倒的に眠い。夢のせいで早起きしてしまった上に昨晚は寝るのも遅かった。ついついバスケットゲームを始めてしまったのがいけなかった。祐一は何故かサッカーにしてもバスケットにしてもあまり強くないチームのファンになる傾向がある。サッカーではヴィオラ、つまりフィオレンティーナのファンだし、バスケットはサクラメントキングスのファン。共通点は昔強かったということだろうか、昨晚も祐一はゲームでキングスを使っていた。キングスは今もそこそこ強いのだが祐一の実力不足でCPUのキャブスに連戦連敗。勝てるまでやめないと決め、キャブスのエースであるレブロン・ジェームスに向かってふざけんな！と叫びながら結局夜中の3時までかかってしまった。

だからとは言わないが、次に祐一が頬にくっきりと腕の痕をつけて顔をあげたときは昼休みになっていた。

「お前さ……そんなに寝てたら目ちっちゃくなるぞ」

目の前に座るタケットが椅子の背もたれに腕と首を乗せてこちらを見ている。

「ふああ……いいよ、別に」

「先生も呆れてたぞ？この1週間真面目だったから見逃してくれてたけど、英語の沢井なんかはかなりキてた」

「まじ……？」

「ああ、お前もこの学校入ったからには授業くらい真面目に受けないと今度のスキー旅行連れてってもらえないぞ？」

確かに祐一は以前に比べ難しくなった授業内容についていこうとめずらしく必死になって授業を聞いていた。おそらく冬休み前にあるであろうテストまでに追いつかなければならないからだ。しかし、そんなことよりも

「今、初めて聞いた単語が混ざってたんだが」

「そうか、祐一知らないのか。今朝は寝てたしな。来週の火曜から2泊3日のスキー旅行」

「初耳……」

「ほら、お前の机に乗っかってるプリントにも書いてるぞ」

「ほんとだ……、めんどくせー……」

「ちなみに冬休み終わったら修学旅行もあるからな」

「……はい？」

「祐一もしかして、もう行った？」

「……行ったな、夏に」

「ダブってもないのに修学旅行2回行くとか人生どんだけ得してんだよ」

旅行は嫌いじゃないが、友達もろくにいない状態で行きたいものではない。

「サボろうかな……」

「たぶん単位だから無理だと思うぞ」

「転校したくなってきた……」

「そういうなって、楽しいからよ。ところで飯どうする？」

タケトは笑いながらバシバシと祐一の肩を叩く。

「そうだな……腹もへってないし、別にいいかな」

「それ以上痩せたら骨と皮だけにならないか？」

「俺はこれでも70kgある」

「うそ!？」

「これでも身長182cmだしな」

祐一は筋トレが趣味なわけではないのだが毎日、腕立て、腹筋、背筋、スクワット、そしてストレッチをするのが中学校からの習慣だった。何故かハルカに強制されていたのだ。おかげで腕相撲なら殆ど負けたことがない。

「うっ……でかいとは思ってたけど……俺よりでかいとは……」

「タケトって何センチ？」

「179……」

「いろいろと惜しいな」

「バスケ部入ってくれよ」

「やだよ、ユニフォーム白じゃん」

「……何色だったらいいんだよ」

「紫」

「なんでだよ!?!」

「ま、それはいいとして5、6時間目って体育だっけ？」

「あつ、そういえば自習だってよ体育」

「……勝負するか? ベンチ部員」

「テメエ……なめるなよ? いいだろう。メンバー集めて3on3だ
!!」

「ちなみに健吾は俺のチームな」

体育の授業では健吾のクラスと合同になるのだ。そして健吾はバスケ部のスターティングメンバーであり、エースでもある。

「ず、ずりいぞ!?!」

「いいだろ、俺、素人なんだし、あつ負けた方は明日の昼飯おごり
な」

「……メンバー探してくる」

「気をつけてな」

タケトは脱兎のごとく教室を去り、廊下を駆けていった。

2章 1 (後書き)

お読み下さいまして、ありがとうございます。

主人公の設定を見失いつつありますが、たぶんこのまま突き進みます……。

南しゅう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2514f/>

そして、世界は崩れゆく

2011年1月14日14時32分発行